

保育現場における音楽遊びの位置づけ

山 中 文
(新見公立短期大学)

1. 幼児期の音楽活動

周知のように、幼児の音楽活動は、成人のそれとは異なる。成人は、音楽の表現活動あるいは鑑賞活動において、すでに習得した音楽のスキーマを適合させているが、幼児は、音域、言語表現等の発達はまだ途上であり、加えて音楽のスキーマも確立していない。そのため、幼児の音楽活動は、曲全体の再表現が目的ではなく、他の活動と関連しながら、あるいは外的刺激によって生じる、音楽的表象に基づく遊びのひとつであることが多い。つまり、思いついたままを即興で歌ったり、身体を動かしたり、音の素材や仕組みを楽しんだりする遊びとして行っているのである。

したがって、保育現場において、幼児の音楽活動を、成人のそのミニチュア版や低レベル版として行わせるのは、筋違いであろう。が、他の活動に関連させて音楽が単に組み込まれていれば音楽活動になっているというわけでもない。その場合、音楽は、場の雰囲気をなごませる効果や他の活動の補助的役割を持つことこそあれ、幼児にとって主体的に遊べるものになってはいないからである。保育全般を見通して音楽的成長をみていけば、保育現場の音楽活動は、特定の演奏を特には目的としない、多方面の発達と関連した、何らかの音楽的表象に基づいた音楽遊びが中心になると考えられる。

2. 保育現場における音楽遊び調査より

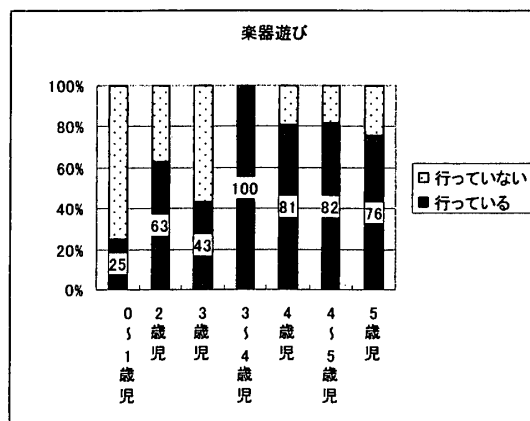
では、実際に、保育現場ではどのような音楽遊びがどのような意図で行われているのであろうか。このような観点から、今回は、岡山県の幼稚園と保育所の保育士を対象にアンケート調査^{*}を行った。¹

^{*}02年8月に実施。岡山県の幼稚園、保育所からランダムに100園ずつを抽出し、2部ずつ計400部を送付、幼稚園60園から109部、保育所36園から63部を回収(計172部、回収率43%)。

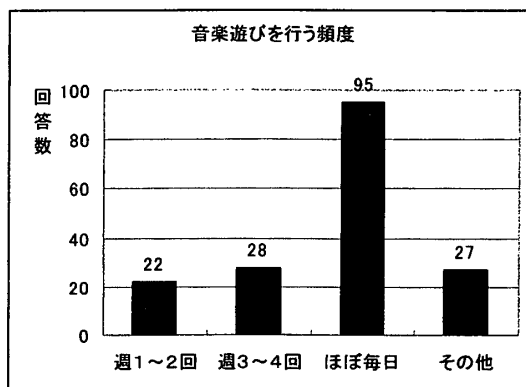
(1) 保育現場における音楽遊びの種類と頻度

保育者が行っている音楽遊びは、全172件のうち、手遊びが170件(98.8%)、歌遊びが138件(80.2%)、リズム遊びが135件(78.5%)、表現遊びが127件(73.8%)、楽器遊びが125件(72.7%)、伝承遊びが105件(61.0%)、音遊びが44件(25.6%)、絵描き歌が35件(20.5%)であった。(複数回答含む)

手遊びは、回答全体の98.8%が行っていると答えたように、回答者の担当クラス別に集計しても、ほとんどの年齢クラスでも行われている音楽遊びのひとつである。それに対して、たとえば、楽器遊びは、3歳未満児担当保育士の回答より、3歳以上児担当保育士の回答の方に、行っている割合が多い。



また、音楽遊びを行う頻度は、ほぼ毎日という回答が95件であり、全体の55.2%を占めている。

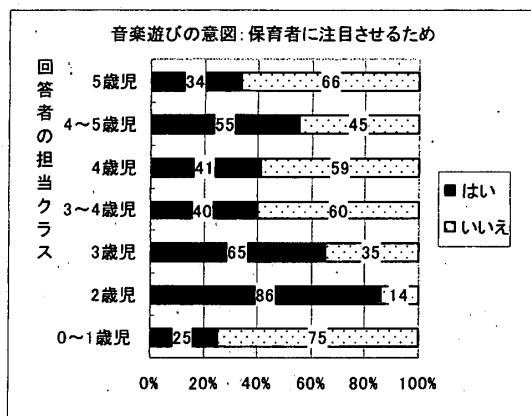
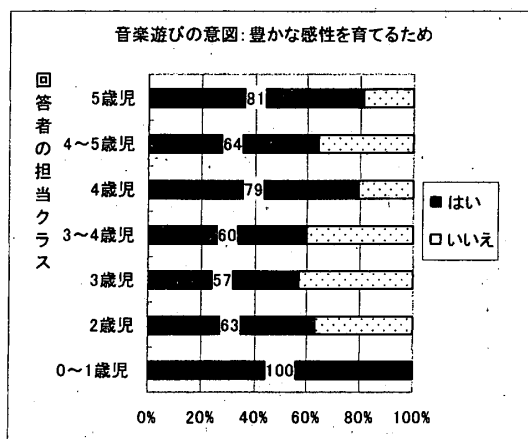
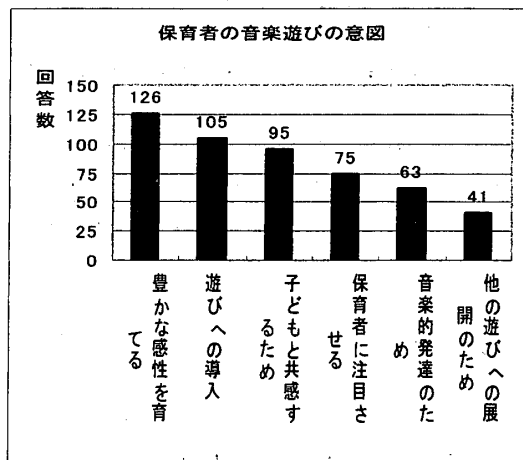


(2) 保育現場における音楽遊びの意図と場面

以下は、音楽遊びをどのような意図で行っているかという問いに対する回答数の結果である。これによれば、「豊かな感性を育てるため」に音楽遊びをする、という回答が一番多く、全回答中73.3%の保育士は、そのような意図を持っている。

しかし、これを、担当クラス年齢別に見ると、「豊かな感性」や、「子どもと共感するため」という回答は0-1歳児クラス担当で100%であるのに対して、3、4歳児クラスにかけて回答数が減少する傾向にあった。また、2、3

歳児クラスでは、「保育者に注目させる」という意図で音楽遊びを行うことが多いことがわかる。



また、音楽遊びを行う場面を問うと、以下のよう回答になった。ここから、音楽遊びは、ある目的をもって、発表の場である集会の出し物の中で取り上げられている活動になっている様子が窺える。

音楽遊びを行う場面	回答数	割合
集会の出し物の中で	130	75.60%
設定保育で	123	71.50%
遊びへの導入	110	64.00%
自由遊びで	107	62.20%

3. 保育現場における音楽遊びの位置づけ

先の集計結果から、保育現場における音楽遊びの頻度は高く、手遊びを中心に、多くの種類の音楽遊びが行われていることがわかる。

しかし、その位置づけには、二つの特徴がある。

ひとつは、音楽的成長や音楽活動の特性以外の意図があるということである。

回答全体では「豊かな感性を育てる」という項目に一番回答数が多かったが、先述したように、それらの回答数は、3、4歳児担当者になるにつれて4割方減少する。そして、逆に「保育者に注目させるため」という意図が、ことに2、3歳児担当の回答に多くなる。ここからは、保育者が音楽遊びを行う意図として、音楽遊びを幼児期の音楽活動としてとらえ、豊かな感性と結び付けていこうとする様子は見受けがたい。特に、言語指示による誘導がむずかしい2、3歳児に対しては、音楽遊びを、保育者に注目させ、保育者の次の指示が有効になるための活動として位置づけている様子が明らかである。

もうひとつは、一定の学習課題を持った音楽活動との区別を設けていないということである。

先述したように、回答者の75%は、音楽遊びを集会の出し物として行っていた。また、行っている音楽遊びの自由記述欄には「鼓笛」「和太鼓」などの記述が、また、実施を検討している音楽遊びの自由記述欄にも「季節の歌」「合奏」といった、一定の演奏を目的とするものがあげられていた。

高橋たまきは、保育における遊びの中で、「遊び」という呼称をとっているが、前もって幼児に課する課題が明確に決まってい、それを遊びという方法を用いて指導するものを「遊び仕立ての課題活動」と呼んで区別している。² その是非については稿を改めるが、ともかくも、アンケート結果は、まさに、音楽遊びを、音楽演奏活動を遊び仕立てにした課題活動としてとらえている様子が窺えるものである。

1. 本アンケートは、03年度新見公立短期大学総合研究・音楽教育領域ゼミの学生7名と協力して行ったものである。

2. 高橋たまき他『遊びの発達学 展開編』培風館、2000、p.165